

友の会ニュース

Antitled 友の会 第1回研究大会記録

Antitled 友の会第1回研究大会が9月9日(金)立命館大学衣笠キャンパス(敬学館KG109号室)において行われた。参加者申し込みは運営を含めて計87人に上り、対面参加とオンライン参加を併用したハイブリッド方式で行われた。はじめに司会の河原梓水氏から開会の辞と趣旨説明が述べられ、個別報告へと移った。要旨や討論の様子は以下の通り。

午前の部(個人報告)

個人報告① 猪原透 「現代文明」と「人口問題」——米田庄太郎の社会学と対外觀

京都帝国大学の社会学講座の初代担当者である米田庄太郎は、日本社会学の初期を代表する学者として、また「現代文明」という視点から労働運動・女性解放・メディアと消費活動といった多彩な問題について評論を行った大正期の著名な言論人として知られている。これに対して看過

されがちなのは、米田が第一次世界大戦をはじめとする同時代の国際情勢を社会学的な考察の射程に取り込んだ点である。本報告では特に後者の側面を掘り起こしつつ、米田における人口問題への言及を手掛かりとして、彼の多彩な議論を貫く軸について検討を行った。

本報告ではまず、米田と同時代の社会学者である建部遯吾と、米田の教え子にあたる高田保馬の人口論を取り上げて、当時の社会学が人口問題をどのように論じていたのかを確認した。建部や高田はマルサス人口論を踏まえて、人口増加によって食料をめぐる争いが生じることは不可避であると考えた。また、それに国際協調への不信感が組み合わさることで、人口増加への対応策として領土の拡張が必要であり、それを実現するためには国力の増大＝さらなる人口増加が必要であるという屈折した立場をとった。

これに対して米田は「現代文明国」が人口減少へと向かいつつあることを指摘し、また人口減少をもたらす現代文明の意義を擁護することで、人口増加を前提とした建部らの人口論を間接的に批判した。こうした米田の立場からすれば、第一次世界大戦の勃発に伴い各国が人口増加に向けた政策を取り始めたことは逆風であったと言えるが、それでも米田は各国の人口増加策が成功を収めることは困難であると考えた。また、

米田は国際的な取り決めによって人口の抑制を行うことが必要だと考えたが、国際連盟がそうした取り組みを行わないことには不満を感じていた。

このように米田は人口問題、とくに現代文明国における人口減少への関心を軸として国際社会に対する活発な評論を行った。ただし 1920 年代以降になると、建部や高田らが旺盛に人口問題を論じる一方、米田は人口問題への言及を控えるようになり、自身が少数派であるという孤立感を強めていったとみられる。

個人報告② 西澤忠志 明治・大正時代の日本音楽界における「音楽批評」の位置づけ——1916 年までの音楽雑誌における「音楽批評」の諸傾向に基づく考察

本発表は、明治・大正時代の音楽雑誌に掲載された音楽批評を事例に、どのような言説が「音楽批評」と位置付けられた上で掲載されたのか、それに対してどのような議論があったのかを明らかにする。

これまでの日本における音楽批評史研究では、明治時代における音楽批評は研究対象としてほとんど取り上げられることは無かった。これは音楽評論家の堀内敬三によって、近代日本音楽史における音楽批評の始まりが、音楽評論家の大田黒元雄などに

よって 1916 年に創刊された音楽雑誌『音楽と文学』に位置付けられているためである。これを受け、日本の音楽批評史研究は、特に大正・昭和時代の西洋音楽を対象とした事例を取り上げてきた。

しかし、近年の近代日本音楽史研究では、明治時代の音楽批評に注目した研究が行われている。これは新聞に掲載された演奏批評とそれに基づく議論をもとに、どのようにして日本で音楽の「批評」あるいは「批評家」が形成されてきたのかを明らかにしたものである。

以上の先行研究をもとに、本発表は音楽雑誌を事例に、どのような言説が「音楽批評」と位置付けられた上で掲載されたのか、それに対してどのような議論があったのかを明らかにする。本発表で対象とする音楽雑誌は、1916 年までに創刊されたもの(『音楽雑誌』、『音楽之友』、『音楽新報』、『音楽界』、『音楽』、『月刊楽譜』)である。

以上を通じて本発表は、『音楽と文学』による音楽批評の前提にあった理想的な「音楽批評」像が、同時代の「批評」観や音楽界の動向、音楽を取り巻く社会的動向の中でどのように形成されたのかを提示する。

午後の部 (パネルディスカッション)

パネル報告① 注釈者の奇妙な奮闘——中世武家官僚の学知と「御成敗式目」

古来、学問の本流は、権威あるテキストを深く読み込み、そこに込められた意図を汲み取ることにあった。特に中国を中心とする東アジア漢字文化圏では、学問の方法は、主として注釈という形をとって現れる。権威あるテキストは、それらに付された注釈の枠組みの中で理解され、新たな学説を立てる際にも注釈を新たに付けるという形が取られた。これは日本でも同様である。

ただし、これらの営為は、必ずしも現在行われているような学問的注釈と同じ姿勢とは限らない。もちろん、江戸時代の国学者のように、合理的内容を備える高い水準の実証的注釈を著わしたものもある。しかし一方で、中世に作られた注釈は、たとえば仏教の言説を援用して『古今和歌集』や『伊勢物語』を解説するといったように、多くは神秘性を帯びた、今日的価値観からいえば荒唐無稽なものであり、近現代の学術では相手にされてこなかった。それが近年、中世びとの思考を探る新たな素材として、中世的な注釈の世界へと注目が集まっている。

本パネルでは、かかる問題意識に基づき、「注釈者の奇妙な奮闘——中世武家官僚の学知と「御成敗式目」」と題し、「御成敗式目」の注釈に

関する 2 報告を用意した。

「式目」は圧倒的知名度を誇るテキストであるが、ほとんど目が向けられてこなかったのが、その注釈書、すなわち式目注の世界である。中世に著わされた式目注はいずれも荒唐無稽な珍説に終始するものとされ、「式目」の正確な理解のためにはむしろ混迷をもたらすものとして、従来忌避されてきたのである。

しかし、「式目」自体の読解に資するものという、ある意味まっとうな前提をはずしてみれば、式目注は中世人の法や制度、政治秩序についての思考を伝える興味深いテキストである。特に、鎌倉後期の六波羅奉行人・斎藤唯浄が著した、最初期の式目注である「関東御式目」は、中世武家官僚の学問水準を押しはかる好個の素材だと言える。

まず木下竜馬「御成敗式目注釈の世界」は、式目注釈書の嚆矢たる「関東御式目」に示された理路を読み解き、式目注に内在する問題意識や関心の所在を紹介した。唯浄の営為は、制定時点で公家法との関係が不明瞭だった「式目」を、公家法や漢籍などの〈古典〉との関係性の中に意義づけることにより、「式目」自体を〈古典〉化してその価値を証明しようとする試みと位置付けた。その上で実際に注を読みこんでいくと、大半は公家法と「式目」との引き合わせに終始し、公家法と武家法との観念的融合はあまり成功しなかったと評価した。

次に田中誠「式目注釈と奉行人の学問」では、「関東御式目」を生み出した鎌倉・室町幕府奉行人ら武家官僚の知的環境について概観し、鎌倉中期から南北朝期にかけて武家官僚が引用・書写・所持・賃借した典籍の目録を作成した。また、「関東御式目」には大量の漢籍が引用されていることから、唯浄の漢籍受容について、特に「白氏文集」を素材に検討し、武家官僚の学問環境を探る上で極めて重要な史料であることを明らかにした。

以上二報告を受け、中世における注釈という営為について、特に以前からの研究の蓄積のある「伊勢物語」の例を示す形で中野顕正がコメントを加えた。中世に注釈の付されたテキストには数種あるが、その中において作者と制作年代が明確な式目注のもつ、中世注釈研究上の重要性を指摘した。

質疑応答では、引用史料の解釈、仏典の引用がないことの意義づけ、鎌倉後期にこのような式目注が作成された外在的な理由、武家官僚の漢籍受容の上で金沢文庫がどのような役割を果たしたのかなど、会場やオンライン参加者からさまざま質問が寄せられた。

パネル報告② 3つの位相で読み解く近代遊廓像——自由廃業・都市計画・『春駒日記』

本パネルは近代遊廓をめぐる諸問題を、批判的な語りからは一旦距離を置き、多角的視点から議論・再構築しようとするものである。従来の研究は公娼制度が抱えていた数々の問題を可視化した、その反面、枠組みに収まりきれない事象である、強い娼妓像、取締・地方行政の論理などは捨象されてきた。本パネルはその中でも遊廓イメージから切り離されてきた警察、地方行政、当事者という3つの視点から検討することで、多様な展開を見せていた遊廓・公娼制度像の再構築と当該分野の研究発展を試みる。

寺澤優「自由廃業運動は公娼制度に何をもたらしたか——山根正次を中心に」は、廃娼運動中心の研究史において、芸娼妓の自由を法的に確保し、広く戦いを呼び起こした運動として肯定的に語られる自由廃業運動が公娼制度にもたらした影響を、取締側であった内務官僚兼衆議院議員の山根正次の思想と行動から考察する。山根思想の特徴は「梅毒亡国論」とされる梅毒への危機意識であり、当時内務省警察医長を務めた公娼制度における衛生対策の要をなした。娼妓が廃業することにより梅毒が蔓延することに対する大きな懸念を抱いた山根が、自由廃業運動への対抗措置として構築したのは、改正行政執行法による私娼の梅毒検診・治療制度であり、その後長きにわた

って近代日本の売買春管理体制を構築する私娼黙認システムの基礎であった。つまり、自由廃業運動という表面的には娼妓を解放する運動が公娼制度にもたらしたのは、「解放」の反動としての私娼をも含みこむより広い売春管理体制の形成であったといえる。

眞杉侑里「遊廓移転にみる都市と売春営業の問題」は、1923年に移転を行った旭遊廓（愛知県名古屋市）の事例を取り上げ、移転前の立地、移転に至る経緯・世論、移転作業の詳細を明らかにし、内務省標準内規のもとで運営された地方都市の遊廓のあり方について検討する。旭遊廓は、1874年に県下初の公娼指定地として設置されたが、明治末～大正期に入るとその立地が問題となり移転計画が持ち上がった。しかし、実際の移転に至るまでは12年近くの年月を経ており、汚職事件等も発覚し、移転計画は二転三転した。結果として1923年には名古屋市内の端に移転し、営業を開始した。しかし移転先となった中村地域は遊廓候補地としては本来不適切とされる地域であり、標準内規に定められた「適格地」に適合させるためにより閉鎖的な構造が作られたと想定される。こうした経過からは一口に移転といっても都市の実情に強く影響される地域の遊廓のあり方が見られる。

山家悠平「『春駒日記』(1927)が描く吉原遊廓の日常風景——<告

発>から自己表現の文学へ」では、森光子の春駒日記を取り上げた。吉原遊廓の娼妓春駒こと森光子は1924年の春遊廓から逃走し、廃業後に『光明に芽ぐむ日』を発表し悲惨な遊廓の実情を世に訴え、広く知らしめた。本報告では第一作目に比べて研究史では積極的に評価されてこなかった『春駒日記』(1926)を題材として、森のストーリーテラーとしての側面に注目し、遊廓で過ごした時間を自分の言葉で整理し表現することが森にとってどのような意味をもっていたのかを①客や同僚との様々なコミュニケーション、②手に負えない娼妓たち、③恋を描くこと、④たすけあう娼妓たち、の4つの視点から考察する。

ここで描かれたのは、廃娼運動家の一面的な遊廓表象からは抜け落ちていた、娼妓たちの豊かで複雑な人間関係のコミュニティであった。その背景には森の遊廓への愛着や郷愁に似た当事者ならではの感覚があり、売春を不幸とする視点からは評価できない様々な事象が存在した。その中には遊廓という圧倒的な暴力の中で奪われた時間を語り直すことで時間を取り戻し、同僚から託された物語を紡ぐことで、「無垢な犠牲者」「墮落した醜業婦」イメージに抵抗しようとする森の語りがあったといえる。

討論では、はじめに①中村遊廓の移転問題に関し、移転先又は移転元の地元住民の動きに関して仙台の事例との比較で質問がなされた。その後②『春駒日記』と社会運動との関連性に関して、③次に売買春史を研究者が肯定的に語ることへの葛藤の有無、④大正時代に恋愛論の持つ政治的な意味合いを背景とした『春駒日記』恋愛を語ることの意味や、また⑤売春産業に従事した当事者による語りの有無に関して質問がなされた。報告者側からは、①地域住民の動向については今後の課題であること、②『春駒日記』は公娼制度批判の意図が強いものであったと推察されること、③売買春を語ることの難しさ、④当該期の恋愛をめぐる言説とのすり合わせの重要性、⑤記録の残存状況が述べられ、報告は終了した。以上2つの個別報告、2つのパネル報告ののち閉会の辞が述べられ、盛況のうちに閉会した。